

飯南町立保育所の今後のあり方に関する緊急提言（案）

～「箱」の維持から「人（保育士）」の救済と再生へ～

1. 現状の危機認識：人員体制の構造的破綻

本検討委員会は、共有されたデータおよび現場の意見に基づき、現行体制を継続した場合、子どもの安全確保および保育士の就業継続に重大な支障が生じる「限界点」に達しているとの認識に至った。

- **深刻な人材流出：** 過去2年間で、将来を担うはずの20～30代を中心に8名の職員が離職し、ギリギリの運営が常態化している。
- **「お金」で解決できない限界：** 保育士確保対策事業に予算を投じているが、勤務条件（4～5年）経過者の離職率は非常に高くなっています。現在の働き方のままでは、採用しても数年で辞めてしまう「穴の空いたバケツ」状態にある。
- **現場の過度な負担とリスク：** 産休・育休の代替が確保できず、所長・主任が現場補填に迫られ、人材育成や安全管理に専念できない異常事態である。さらに、さつき保育所は災害警戒区域内に位置し、物理的な安全確保も困難な状況にある。

2. 緊急提言：令和8年度からの「構造的再構築」

施設を維持する「終わりの議論（縮小）」ではなく、先生たちが安心して働ける「始まりの議論（再生）」へと舵を切るため、以下の施策を提言する。

① さつき保育所の「さつき会館」への移転・共用

- **内容：** さつき保育所の独立園舎を廃止し、さつき会館（支所・公民館の複合施設）内を改修して移転する。
- **目的：** 災害リスクを回避し、他部門職員や地域住民との交流を通じて、保育士の孤立を解消する。
- **運用：** 小規模保育の枠組みを基本としつつ、「へき地特例」を活用して全年齢の保育を維持する。

② 土曜保育の拠点集約

- **内容：** 全園実施から、拠点園（来島保育所等）での共同実施へ移行する。

- **目的：** 代休サイクルを正常化し、保育士が人間らしく休める環境を保障することで、平日の保育体制を安定させる。

3. 現場救済：働き方改革と「辞めない」仕組みづくり

- **業務の抜本の見直し：** 町主導で行事の簡素化を進め、ICT活用により事務負担を徹底的に削減（ゼロ化）する。
- **チーム保育の導入：** 園の垣根を越えた連携により、担任一人が責任を抱え込むリスクを解消し、支援が必要な子への組織的な対応を可能にする。
- **移転準備のバックアップ：** 引越し等の事務作業は町が全面的に支援し、現場の負担を最小限に抑える体制を構築する（さつき保育所）。

4. 持続可能性のための「地域の覚悟」

移転に伴う公費投入を行う以上、行政と地域は以下の責任を共有することを条件とする。

- **児童数維持へのコミット：** 地域と行政が一体となり、定住促進や空き家活用などの「子どもを増やす取り組み」に邁進すること。
- **「地域で見守る保育」への参画：** 地域住民が有償ボランティア等として保育運営（見守りや環境整備）に加わる体制を構築すること。

5. 結び

本緊急提言は、現場の「責任感」に甘え続け、全員が共倒れになるのを待つのではなく、今、必要な改革を断行し、飯南町の保育を再生させるための決意である。保育士を守り、ひいては子どもの安全と保育の質を将来にわたり守り抜くための第一歩として、官民一体で歩み出すことを強く求める。

また、本委員会は今後も、社会から求められる保育ニーズの変化や児童数の推移、保育士の定着率向上などを注視し、飯南町にふさわしい保育所のあり方について、継続的な検討を行うことをここに表明する。

さつき保育所のさつき会館への移転・複合化による地域保育の維持

1. 背景と課題

児童数 10 名前後の規模のさつき保育所は、老朽化・土砂災害警戒区域という安全面の課題、保育士不足による負担感と孤立感、単独施設維持による非効率な運営コスト（光熱費・除雪・メンテナンス）という課題を抱えている。

2. 全国的動向：複合施設型保育へのシフト

単独建替えではなく、既存の拠点施設へ集約する手法は全国的に増えています。

- **公共資産マネジメント**： 公民館や支所と機能を統合し、公共資産の密度を高める。
- **孤立させない保育**： 保育士が行政職員や地域住民と同じ屋根の下で働くことで、精神的・実務的負担を軽減する。
- **小さな拠点づくり**： 飯南町のような中山間地域において、「そこに行けば誰かがいる」安心感を創出する。

3. さつき会館への統合プラン（令和 8 年度実現目標）

さつき会館にあるスペースを活用し、小規模保育所として再編する。約 20 畳の保育室確保、志々未来ひろばの園庭代替利用、へき地特例により 3 歳以上児も就学前まで受け入れ可能とし、安全で効率的な保育環境を構築します。また、保育士と、地域住民（保育補助・有償ボランティア）を組み合わせた体制を構築し、保育士を専門業務に専念させる（チーム保育）。

【比較：小規模保育所（複合型）と従来型保育所】

項目	小規模保育所（さつき会館複合）	従来 of 単体保育所
定員・規模	6～19人（現状に適合）	20人以上想定
施設	既存公共施設を活用	専用園舎が必要
安全性	災害リスクの低い拠点	土砂災害警戒区域
人材	孤立しにくく定着しやすい	孤立・離職リスク高
コスト	維持管理費を抑制	固定費負担が大きい
将来対応	児童減少に柔軟	統廃合が必要

4. 期待される効果

◎保育士の離職防止◎多世代交流型保育による定住促進◎安全性・防災力の向上

保育所の運営形態と教育・保育方針の整理

1. 運営形態の主なパターン

形態	特徴	メリット	課題
公立（直営）	自治体が直接運営	経済的な安定感、行政施策との連動がスムーズ。	柔軟な延長保育などの対応に時間がかかる場合がある。
公設民営	建物は市町村、運営は民間	コストを抑えつつ、民間のノウハウ（特色ある教育）を導入。	委託先の選定や管理に透明性が求められる。
民立民営	土地・建物・運営すべて民間	独自の教育方針を打ち出しやすく、サービス競争力が高い。	経営状況によって撤退のリスクがゼロではない。
小規模・共同運営	地域参加型、柔軟	少人数で目が届きやすく、企業の提携枠で優先入園ができる。	2歳児で卒園。場合によっては3歳児以上も受け入れ可能。

2. 教育・保育方針のトレンド

「預かる場所」から「育つ場所」へ。今、注目されている方針の例です。

- **のびのび・自然体験型**：泥遊びや散歩、地域資源を活かした体験を重視（非認知能力の育成）。
- **主体性尊重型（見守る保育）**：大人が指示するのではなく、子どもの「やりたい」を起点に活動を構成。
- **地域交流・多世代共生型**：高齢者施設や地元の商店街と連携し、地域全体で子どもを育てる。
- **ICT・国際理解型**：英語教育やタブレット活用など、小学校教育への接続を意識。

3. 保育方針・保育観の違い

観点	主な考え方の例
子ども観	見守る保育／指導型保育
遊び	自由遊び重視／カリキュラム重視

自然との関わり	森の保育・外遊び重視
異年齢	縦割り保育／年齢別保育
インクルーシブ	障がい・多様性を前提

4. 昔（昭和～平成初期） vs 今（令和）の方針比較

教育・保育方針が「昔」と「今」でどう変わったのかを深掘りすると、単なる流行ではなく、「社会が子どもに求める力」が根本から変わったことが背景にあります。かつては「集団に適応し、指示を正しく聞ける子（認知能力重視）」が求められましたが、現在は「自分なりに考え、他者と協力して答えのない問いに向き合える子（非認知能力・主体性重視）」がゴールとなっています。以下の表に、その決定的な違いをまとめました。

項目	昔：一斉・適応型（昭和～平成）	今：主体性・探究型（令和～）
保育のスタイル	「一斉保育」 全員が同じ時間に、同じ活動（製作・歌など）を行う。	「自由保育・コーナー保育」 子が自分の興味に合わせて遊びを選択。異年齢が混ざることも。
育てたい能力	「認知能力」 文字・計算・知識など、目に見える成果やスキルの習得。	「非認知能力」 意欲、自制心、やり抜く力、他者への共感、回復力。
大人の役割	「指導者・先生」 指示を出し、一律の基準で評価・指導する。	「環境の構成者・パートナー」 子の興味を観察し、環境を整え、共に驚き、対話する。
安全と権利	「管理・しつけ」 先生の言うことを聞く。プライバシー意識は低め。	「権利・プライバシーの尊重」 着替えを隠す、性差を押し付けない、子の意見を聴く。
行事のあり方	「完成度重視」 親に見せるための練習を繰り返し、完璧な演技を目指す。	「プロセス重視」 練習過程の試行錯誤を大切にし、無理のない自然な姿を見せる。

なぜ、ここまで大きく変わったのか？（3つの背景）

1. 「AI時代」への危機感

知識や計算などの「認知能力」は、AIやロボットが得意とする分野になりました。人間独自の価値は「好奇心」や「創造性」、そして「チームで取り組む力」にあると考えられ、それらは乳幼児期の遊びの中でしか育たないことが科学的に証明されています。

2. 「不適切保育」への反省と子どもの権利

かつての「厳しいしつけ」や「一斉の強制」は、現代では「不適切保育」や権利侵害と捉えられるケースが増えました。「こども基本法」の施行により、子どもを「守る対象」だけでなく「意見を持つ一人の人間」として尊重することが義務化されています。

3. 多様性（ダイバーシティ）の加速

「みんな同じ」を目指す教育は、個性を潰すだけでなく、外国ルーツの子や発達に特性がある子を排除してしまいます。今は「インクルーシブ保育（みんなが混ざり合って育つ）」が当たり前になり、個別のニーズに合わせた柔軟な方針が主流です。